

総合的な学習の時間部会

研究主題 「総合的な学習の時間のカリキュラムマネジメント」

—生徒による授業評価を踏まえた協働推進体制の構築—

研究の概要

これまでの本委員会の報告を踏まえ、先進校の実践を基に、「総合的な学習の時間」の実施上の課題を把握し、その解決に資する情報を提供する。次に、生徒による授業評価の実際について先進的な事例を基に、各学校で参考になる情報を提供する。さらに、今後の本時間への新しい考え方についても提案できるものをまとめた。

I 研究の目的

平成15年12月に新学習指導要領のさらなる定着を進め、そのねらいの一層の実現を図るため、総則を中心に一部改正が行われた。「総合的な学習の時間」（以下「本時間」と表記する）についても、後述のように一層の充実を目指すことが示された。

年次進行で本格実施が始まり、各学校では実施上の課題が具体的にようになってきた。そこで、本委員会では、本時間のねらいと内容を踏まえ、全体計画の作成や地域との連携の在り方について実践的な提案を行い、生徒による授業評価を活用しながら本時間の学習活動の工夫・改善を図る方途を明らかにすることを目的とした。

II 研究の方法

研究を進めるに当たっては次のような計画を立てた。

- 1 各学校における「総合的な学習の時間」の内容について共通認識をもつこと。
- 2 研究主題の中心的な概念である「カリキュラムマネジメント」について実践に即しながら検討すること。
- 3 先進的な学校の事例を含めて検討し、授業改善につながるよう実践的な取組を提案すること。

III 研究の内容

1 総合的な学習の時間の一層の充実と「カリキュラムマネジメント」の考え方

(1) 指導要領改訂のねらいと研究主題

「総合的な学習の時間」について、前記の新学習指導要領の一部改正等では、平成15年10月の中央教育審議会の答申にある現状と実施上の課題を踏まえて、以下の要点が示されている。

ア 各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること。

イ 各学校において、目標及び内容を定める必要がある。

ウ 各学校において、全体計画を作成する必要がある。

エ 目標及び内容に基づき、学習状況に応じて適切な指導を行う必要がある。また、学校図書館の活用、他の学校との連携、各種社会教育施設や社会教育団体等との連携、地域の教材や学習環境の活用などについて工夫する必要がある。

これまで、本委員会では、本時間の学習内容や方法、学習課題などの具体的な方法に

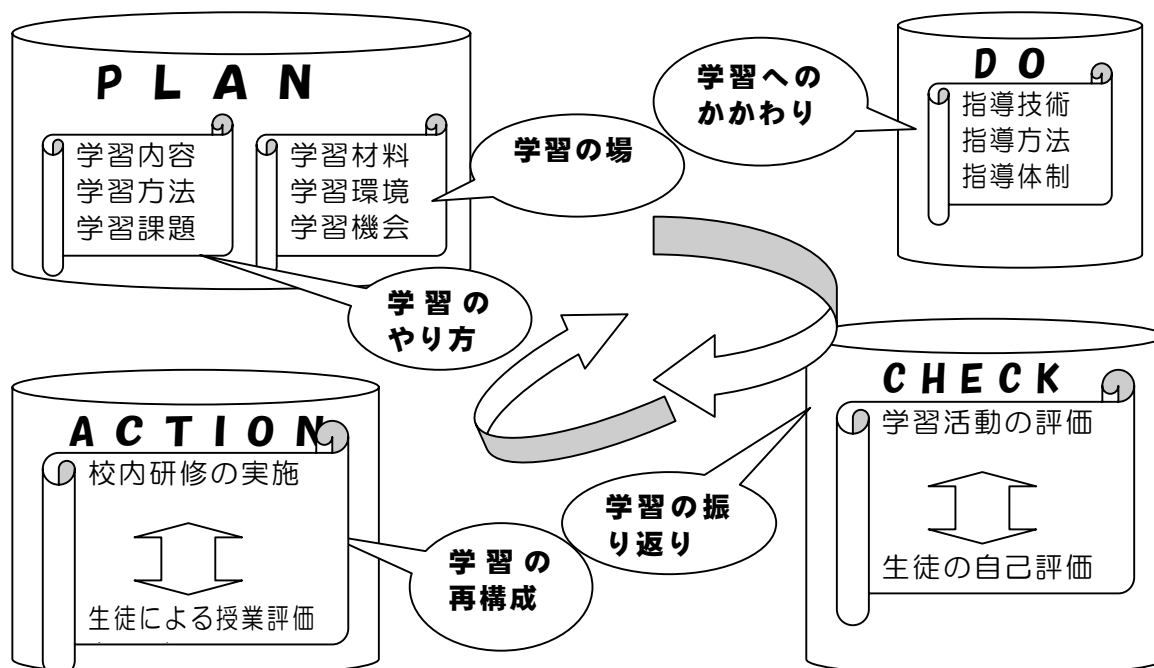
かかわる研究や、学習評価や生徒の自己評価などの評価にかかわる研究に取り組んできた。本格実施を迎え、学習指導要領の一部改正の趣旨を踏まえて各学校が本時間の改善充実を図るためには、これらの研究を基に、計画・実施・評価・改善の過程を総括的にとらえ、生徒による授業評価を生かしながら校内研修などの機会を活用していくことが大切である。

そこで本委員会では、「カリキュラムマネジメント」という考え方を援用し、①在学期間を見通し、年間の学習活動や評価活動の全体計画を作成すること、②ねらいを達成するために効果的な地域社会と連携を図った実践に取り組むこと、③生徒による授業評価を活用し校内研修などの機会では本時間の改善と充実を図る推進体制の構築に取り組むことの3点を研究の重点として取り上げた。

(2) 「カリキュラムマネジメント」の考え方

「カリキュラムマネジメント」という概念について、全国の高等学校における先進事例の中では「教育課程全般の経営」ととらえる例があり、平成15年度東京の教育21研究開発委員会教育課題部会では「マネジメントサイクル」という考え方をを用いて、教育課程の評価の在り方について研究している事例がある。また、「これからの進路指導の組織的な取組とその考え方」（平成14年12月東京都教育委員会）の中では「進行管理」という言葉でまとめられている。

本委員会は、本年度共通研究主題の「生徒による評価を活用した校内研修の充実を通して」の趣旨を踏まえ、カリキュラムマネジメントの考え方を援用し、「学校全体の目標と計画の明確化→学年ごとの目標と計画の明確化→実践→評価→校内研修→よりよい実践へ」の流れの中心に「生徒による評価」と「校内研修」を置くという考え方を追究した。研究のねらいとするところは、このような本時間の流れを構成する個々の要素を有機的に結合し、効果的な実践を進めていく進行管理や教育活動全般の経営の在り方を追究することであり、それを「総合的な学習の時間のカリキュラムマネジメント」と呼ぶこととした。



2 総合的な学習の時間の全体計画

(1) 全体計画とカリキュラムマネジメント

前記の中央教育審議会答申は「総合的な学習の時間については「時間」という名称から、教科等とともに教育課程を構成するものであると受け止められにくく、計画的な指導の必要性が理解しにくくなっていること」と指摘している。

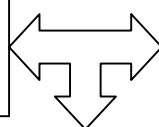
また、教職員の共通理解を進めるだけでなく、生徒に分かりやすい年間の計画や全体の計画を示すことは大切である。分かりやすく計画を示すことが生徒・教職員の意欲的な活動を作る手がかりになり、地域や保護者からも本時間の理解を進め協力を得やすくなる。こうしたことが本時間の一層効果的で工夫された展開を作る素地となるといえよう。

校内組織を確立し、校外の幅広い理解と協力を得る工夫によって、これまでとすれば教員の個人的な力量に頼って進行しがちであった時間から、生徒の主体的な取組が進み、より充実した本時間にしていくことを、事例を加えて提案する。

(2) 全体計画の作成例（年間1単位 「自己の在り方や生き方」を取り上げた事例）

本時間の学習活動計画を立てる際に、入学から卒業までを見通した学習活動計画を立てることが大切である。毎年同じ学習内容や学習課題を設定するのではなく、在学期間中を通してどのような生徒の能力をどのように育てていくのか、という視点をもつことが必要である。同時に、入学してくる生徒の入学までの様々な学習経験や学習の到達点を見定めながら、年度ごとに生徒の学習状況の到達段階に応じて学習内容・学習課題等を柔軟に、しかも計画を立てながら変更していくという教師の集団としてのマネジメント能力を高めていくことも不可欠である。

着目した総合的な学習の時間のねらい
 ・自己の在り方生き方や進路について考察する活動を促す。
 ・生徒が設定した課題の探究を通して知識・技能の深化、総合化を図る



生徒の学習や生活の現状
 学習歴は多様化しているが、本校の特色をよく理解して入学しており、意欲的な生活を送っている。進路に対しての一層の意欲喚起が課題である。

学校としての総合的な学習の時間のねらい

意欲的に学校生活を送る生徒たちに、小・中学校での多様な学習を踏まえ、知識・技能を総合的に発展させて身に付けさせ、自己の在り方生き方や進路を更に深く考えさせる。

1 学 年	ねらい	調査・行動を通して望ましい職業観を育成し、4年後10年後の目標を作る。
	目 標	自己理解
2 学 年	内 容	オリエンテーション・進路適性検査・作文「4年後10年後の私」 進路希望別グループ編成・調査体験活動・職業ガイダンス・シラバス調査・小論文作成・中間報告会・追加や再調査・1年間のまとめ・発表会
	ねらい	調査研究を通して主体的な進路選択能力を育成し、自己表現力を高める。
3 学 年	目 標	自己啓発
	内 容	課題研究・調査研究活動・履修ガイダンス・学問探究セミナー オープンキャンパス体験・自己表現（エッセイコンテスト・小論文・中間報告会）・年間活動の整理・追加や再調査・発表会
3 学 年	ねらい	自己表現力を一層向上させ、進路目標の実現を目指す。
	目 標	自己実現
3 学 年	内 容	調査研究活動・学問探究セミナー・オープンキャンパス体験 自己表現（エッセイコンテスト・小論文・中間報告会）・個別進路学習 3年間の活動の整理・発表会

(3) 年間授業計画と授業評価の観点例

3年間を見通した全体計画に基づき、年次ごとの授業計画を作成する。この事例では、年間授業計画の中で生徒の学習活動に対する評価の観点や授業評価の観点、校内研修の実施を時系列で整理し、授業改善につなげていく計画を示している。

本事例は二学期制45分授業を39単位時間実施した例である。

内容	時	生徒の活動	評価の観点例	教師の授業評価観点例	生徒の授業評価観点例
オリエンテーション・自分の将来を考える	2	学習内容の理解	○進路を考え総合的な学習の時間で学習するめあてをもつ。	○本時間のねらい・目標についての理解を深められたか。	○分かりやすく授業の展開が示された。 ○どのように学習作業を進めるか明確な指示があった。
自己理解	5	生活点検・学習プラン作成	○自己の資質・適性を理解している。 ○学習や生活習慣を見直している。	○生徒の自己理解を深めるための方法・助言が適切だったか。	◎自分の特性を考える機会になった。
大学体験	6	キャリアデザイン体験的な活動 大学生による進路講演会	○進路にかかわる質問を考えている。 ○自分が身に付けるべき資質や能力を理解している。 ○進路を探索する方法を理解している。	○体験活動や講演会の設定が生徒の思索を深めるのに有効だったか。 ○内容が生徒の自己理解を深めるのに有効だったか。	○講演内容が事前によく知らされていた。 ○講演は十分聞きやすい場所や時間があった。 ◎これから身に付けようとする資質や能力を理解できた。
グループ編成	1	学習分野の方向付け	○学問分野を知り自分が調査する対象を明確にしている。	○グループ編成の基準・方法が生徒の方向付けに適切だったか。	○グループ編成は自分の課題意識に即したグループ編成だった。
調査体験活動	5	調査対象の検討 振り返り学習・他者理解	○必要な資料を十分に集めている。 ○他の生徒との比較を通じて自分の調査の特徴を理解している。	○生徒の必要に応じた資料の提供やレファレンスが適切だったか。 ○個々の生徒のニーズの把握は十分だったか。	○必要な資料は適切に入手できた。 ○調べ方などについて助言をもらった。 ◎知りたいことはきちんと調べることができた。
中間まとめ 校内研修	1	自己評価① 授業評価①	○記録をもとに学習活動を振り返っている。	○生徒に自分を振り返らせることができたか。	◎生徒による授業評価を基に校内研修①
履修ガイダンス	2	科目選択	○学校での授業科目の内容を理解している。 ○必要な学習内容に即して科目選択をしている。	○資料や説明が有効、適切だったか。 ○生徒の現状把握に応じて適切に支援できたか。	○学校の授業科目は分かりやすい資料で示された。 ○質問に対して十分な回答が得られた。 ◎必要な科目について考えて選択できた。
職業ガイダンス	2	職業観の育成	○自己と社会とのかかわりや職業について考えている。	○生徒の考えを深めるための資料などの整備ができたか。	○目的にあった表現方法への助言があった。 ◎適切な表現をすることで自分なりに内容を深く考えることができた。
自己表現	3	表現力の育成 体験的な活動の共有と相互評価	○自己の体験を踏まえた表現をしている。 ○他の生徒との共通した課題や異なる課題を見付けている。	○生徒の表現内容・方法の技術的なサポートができたか。 ○生徒が自信をもって自己を表現するための支援ができたか。	○どのように作業を進めるかが分かる説明があった。
シラバス調査	3	調査活動	○講義内容を理解し課題意識をもっている。	○資料や事前指導が生徒の活動に有効だったか。	◎どのように作業を進めるかが分かる説明があった。
1年間の活動整理	4	学習のまとめ	○進路に対する自己の意識の変化を理解している。	○生徒の現状把握と個に応じた支援ができたか。	◎進路希望について自分なりに明らかにすることができた。
発表会	4	発表・相互評価 情報の共有・相互評価	○自己の思いを正確に表現している。 ○発表者の立場に立ってより深い理解に立てるような質問をしている。	○生徒が達成感をもって表現するための支援ができたか。 ○生徒相互の理解・協力を深める支援ができたか。	○発表の方法や手順は分かりやすく示された。 ○話し手と聞き手への指示などははっきりしていた。 ○進め方の準備の役割分担は公平にできていた。 ◎自分の成果や課題は誰にも分かるようにまとめることができた。
まとめ 校内研修	1	自己評価② 授業評価②	○一年間の自己の活動・変容や学習活動全体を振り返る。	○生徒の主体的な振り返りを促せたか。 ○校内研修での改善につながる課題が明らかにできたか。	◎生徒による授業評価を基に校内研修②

3 カリキュラムマネジメントの具体的な活用—地域の教材を活用した体験的な活動—

高等学校での本時間の実施に当たっては、小・中学校での学習経験を踏まえ生徒の活動や成長に役立つ時間であることが求められる。とりわけ高等学校の本時間の特質である①生徒が主体的に設定した課題についての知識や技能が深化できること、②自己の在り方生き方や進路について考察する学習活動ができることが大切である。

また、生徒自身が学習の対象を選択し、教師の適切な指導や援助を得ながら学習の場や学習方法を選択して学習活動に取り組むことが、高校の総合的な学習の時間に期待される。それだけに、総合的な学習の時間では生徒による授業評価を基に、教育活動全体を改善していくことが不可欠である。

以下に紹介する事例は、地域を学習の素材とした体験的な活動の例である。この学校と地域とは施設開放などを通して日常的に様々な交流があり、調査活動にも協力を得やすい。そこで、生徒の小・中学校での地域学習を踏まえ、1学年で「地域を知る」という主題で総合的な学習の時間を設定した。生徒たちは、地域の伝統文化や工芸・産業・自然・生活などのテーマで地域調査を行う。2学年では、1学年での調査研究の成果を踏まえ、生徒の進学希望の多い上級学校の見学と併せて地域での就業体験を行い、地域での職業としての生きた技術を体験し、地域の一員であることの自覚を深め、働くことについての実体験を通して自己の在り方生き方や進路について考えさせることをねらいとした時間を設定した。

(1) 地域を学習の素材として取り組んだ実践例

目標①地域社会の一員としての自覚を深める。

②生徒の課題発見・問題解決への意欲を高め、自己表現力を伸ばす。

③学校外との交流を深め、より地域に根ざし開かれた教育活動を推進する。

実施学年と時期：第1学年2学期

段階	ねらい	生徒の活動	教師の対応
導入	地域社会の一員であることの確認	中学校での地域学習の確認	地域の産業を中心に、既習事項の確認意欲的に取り組むような動機付け
課題設定	地域産業の課題を把握する。	課題設定 事前調査研究	課題設定への情報提供とアドバイス 調査モラルの指導
地域での調査活動	調査体験を通して問題を確認する。	調査活動の記録	安全への配慮・生徒の状況把握 受入先との綿密な連携
まとめ	自己表現力の育成	自己評価 報告書の作成	受入先との情報交換 まとめ作業のアドバイス
<p>カリキュラムマネジメントのポイント：生徒の自己評価を授業改善に活用する。 体験的な活動を取り入れた総合的な学習の時間の学習活動では、生徒が学習を振り返る自己評価が大切である。生徒が学習の記録を基に、どのような学習の場面で、どのような学習活動を行ったのかを自己評価させるが、学習の場面で使用したり活用したりした資料や、情報を提供した方とのやりとりなどの記録から、体験的な学習の成果や課題をとらえる視点をもつことが大切である。</p>			
発表	自己表現力の向上	発表会 相互評価	発表の技術的なアドバイス 自己肯定感・相互尊重の配慮

(2) 就業体験（インターンシップ）など体験的学習を取り入れた例

目標①実際の職場において生きた技術や技能に触れる。

②働く人々に接することで、現実味のある職業観の育成や視野の拡大を図る。

実施学年と時期：第2学年3学期

段階	ねらい	生徒の活動	教師の対応
導入	職業視野の拡大	上級学校見学 職場見学	年間計画の設定・各種調査の支援体制
課題設定	確かな目的意識	課題設定 事前調査研究	課題設定へのアドバイス 調査モラルの指導
体験活動	体験を通して学ぶ	職場での実体験 活動の記録	安全への配慮・生徒の状況把握 受入先との綿密な連携
まとめ	自己表現力の育成	自己評価 報告書の作成	受入先との情報交換 まとめ作業のアドバイス
発表	自己表現力の向上	生徒対象の校内 発表会 相互評価	発表の技術的なアドバイス 自己肯定感・相互尊重の配慮

事後生徒へのアンケートの結果は、「参加してためになった」という生徒が90%、「自分でたてた目的が達成できた」という生徒が93%であった。

自由意見では、「前年度と同じ所があればその時の感想や内容を事前に知りたかった」「班ごとに引率の先生がついてほしかった」などの記述があり、体験や見学の実施に当たって配慮しなければならない今後への課題も明らかになり、有効な実践であった。

4 授業評価を生かした総合的な学習の時間の授業改善

生徒による授業評価を授業改善に結び付けるには、評価項目を精選して実態を反映した評価を行い、結果を教職員間で共有すること、改善の方向性を提示した校内研修を実施して改善の方向性を共通理解とすることが大切である。さらに、その過程を生徒・保護者にも分かる形で公開・説明し、学校がよりよい時間を目指す姿勢を明らかにすることによって生徒による評価の本来の意義が達成されることになるものである。

以下は、授業評価を生かした授業改善の3年間の流れをモデル化したものである。

《1年目（創設期）の取組》

実施前年度に「総合的な学習の時間の評価の視点から」を主題に、校内研修を実施した。その中で、履修と評価、通知票への記入、生徒一人一人に異なる観点から評価する方法などについて意見交換を行った。推進委員会から次のようなまとめを全教職員に提示した。

(1) **基本的な考え方** ①生徒の実態や施設設備を生かした内容とすること。②他の学習と重複しないこと。③「生きる力」の育成を重視すること。④学び方を学ぶ・自分自身を考える機会になること。④生徒と教員の一層の交流が図れること。

(2) **領域の設定理由** ①学校周辺の地域の特色を生かすこと。②生徒の課題に即していること。③生徒の興味・関心や他の教科学習との関連や教員の得意分野を生かせること。

(3) **指導体制・内容** ①1クラス3展開で1年間を3期に分け、それぞれ3つのテーマのロ

ーテーションによりすべてのテーマに取り組ませ次年度につなげるものとする。②4割程度は体験的活動の内容とする。③教員は担当教科を考慮した2～3名で1組のプロジェクトチームを編成する。④チームが合併して指導する事が望ましい。⑤チームの担当者が年間計画案の策定や教材収集や研究を開始する。

《2年目（展開期）の取組》

実施初年度の初めに委員会から、本時間の展開に当たって次のような提示を行った。

- (1) 今年度の年間計画とねらい ①「学び方の学び」を大切にする。②多様な評価を工夫する。③日程と全体の計画・担当者と使用教室等の確定 ④完成年度の計画の検討
- (2) 関係分掌との連携を図る ①教務部とカリキュラムについて ②進路部と体験学習について ③企画調整会議と職員会議への報告
- (3) 担当者会議の開催 年間5回開催（開始前・各期の終了後に反省と次期への取組について・年度末評価）

＜生徒による授業評価の実施：年度末＞

年度末に生徒による授業評価を全教科・科目で実施した。その結果は、翌年度初めに学校だよりに掲載して公表した。本時間については次のような結果であった。

- 1 興味もてる教科・科目とは思わない・あまりそう思わない、の合計が50%を超えて最も多かった。
- 2 進度は適切とは思わない・あまりそう思わない、の合計は50%を少し下回ったが、かなり高い数値であった。

生徒による授業評価のデータは、担当分掌から年度末反省の研修の資料として全教職員に配布した。教員間では、ねらいの達成については一定の成果があったが①まとめの発表が不十分だった。②教員の担当教科とのかかわりに課題がある。③体験学習などで全体の動きが担任に伝わりにくいこと等の課題が指摘された。

特色化を推進する分掌を組織し、教育課程の見直しにも着手することになり、推進委員会から、本時間の在り方を見直し、次年度は年間計画の大枠を3期から前期・後期の2期に分けて実施すること、生徒による授業評価を年3回実施しその結果を授業改善に生かすことの提示を行った。生徒の評価については、生徒の自己評価と相互評価を各期末（7月・11月・2月に実施し、それを踏まえて教員による評価を行い、結果は「個人票」として2・3期の始めと学年末に生徒個人に通知した。

《3年目（改善期）の取組》

前年度の生徒による授業評価・教員による年度末反省（校内研修）を受けて、推進委員会から年度初めに以下の提示を行った。

- 1 前期は、基本的な知識・技術を習得するための期間（「スキルを取得させる学習」と位置付け、課題発見の発想法の学習・アンケートやインターネット・図書館・新聞などからの情報収集の方法・企画書のまとめ方や説明（プレゼンテーション）の方法などを学び、クラス内発表を行う。
- 2 後期には、前期の経験を生かし、自分の興味や関心のある身近なテーマについてグループで調査・研究を行い、学年末の学習成果発表会を行う。

3 生徒による授業評価を年3回行う。

〈生徒による授業評価の活用1：生徒の意識調査の実施→実態把握から共通理解の深化〉

年度初めの授業で生徒の「発想力テスト」と名付けた思考力を養うテストを行った後で、生徒の意識調査を行った。その結果、この時間は「ためになるかもしれない」・「おもしろそうだ」と答えている生徒が70%近いことが分かった。そして、それを受けて担当者会議では、生徒の力を十分に引き出すためには、特定の教員だけでなく学校全体での取組が必要なことの共通理解をもって進めることになった。

〈生徒による授業評価の活用2：授業進行の調査→進行管理〉

新学期が始まって1か月後、①シラバスに沿った授業の進行 ②最初の授業での評価や授業の進め方についての説明 ③履修・修得の理解について ④授業の満足度など前年度末とほぼ同じ項目で生徒による評価を実施し、ほぼねらい通りに進んでいることを確認した。

〈生徒による授業評価の活用3：年度途中の評価→次期の学習に生かす〉

前期の終わりに同じ項目で生徒による第2回目の授業評価を行った。前期の評価の妥当性や生徒自身の受講態度についても項目に加えた。これを全体でまとめて職員会議で配布するとともに、担当者会議などでさらに分析し、後期の実施に生かすことにした。

その結果、学年末の学習成果発表会はパソコンを活用したプレゼンテーションなど前期での基本的な知識・技術を活用したまとめと発表ができ、期待以上の成果となった。

〈生徒による授業評価の活用4：年度末評価 → 次年度に生かす〉

学年末の生徒による授業評価は形式を変えて実施した。①学んだことが実社会で生かせる科目 ②知識や技術が身に付く科目 ③後輩に勧めたい科目等に加え、授業評価によって全体的に授業は変わりましたかという質問項目も追加した。評価を受けて学校として改善につなげるためには、以下の4項目について組織的に分析して実施していく事が大切になる。

① 各時間内で改善が可能なもの（個々の担当者が時間内でも改善が可能なこと）

生徒の課題設定への指導・助言に当たって、方法や個々の生徒との関わり方。用いる教材・教具の準備や他の担当者との連携・協力の在り方。

② 教育課程に関わるもの

ティームティーチングや実施時期・時間、年間指導計画の作成など教育課程の見直しを必要とするもの。

③ 新たな予算措置が必要なもの

図書や資料などの教材や教具の整備やインターネット・マルチメディア機器の充実については、新たな予算措置や予算の組み替えなど各校での自立経営推進予算により工夫が必要になる。更に、ビオトープの設置や多目的教室の改修・設置など大規模な予算を伴うこともある。

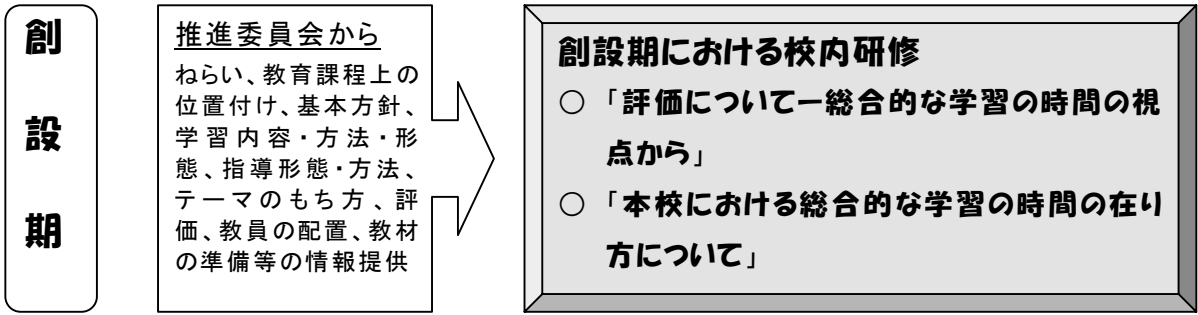
また、外部からの指導者の招へいや校外での活動にも予算の裏付けが必要な場合がある。

④ 家庭や地域との連携が必要なもの

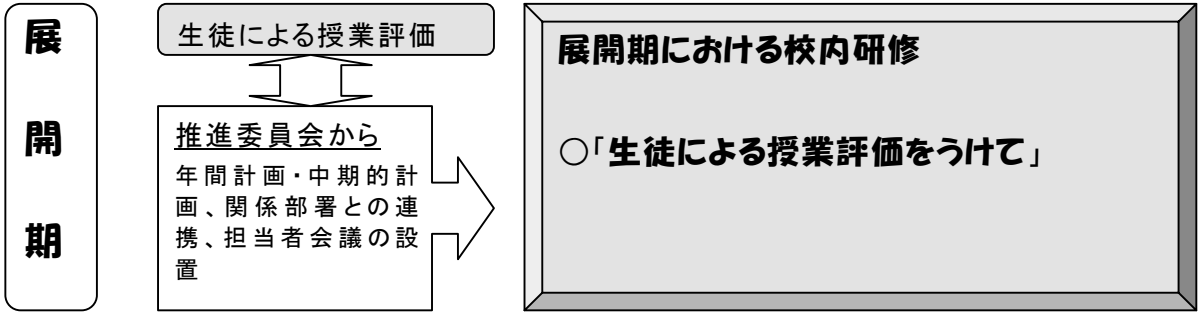
体験活動を重視して校外における活動を行う場合や外部指導者の依頼などには、幅広い情報の収集が不可欠であり、日頃から学校と地域との関係が重要になってくる。

また、近隣の小・中学校での実践の情報は高校にとって貴重な情報となる。

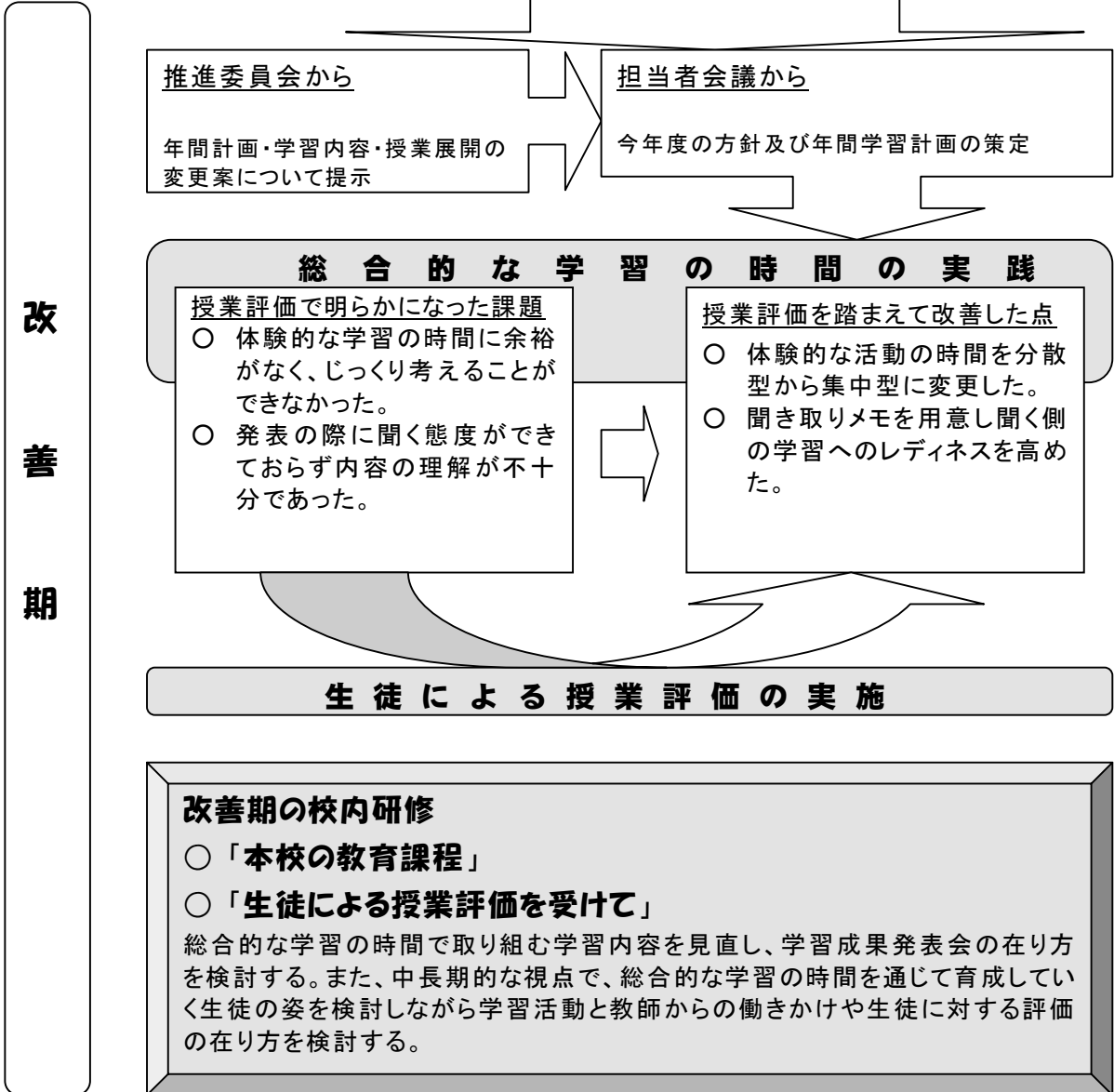
《1年目の取組み》



《2年目の取組み》



《3年目の取組み》



IV 研究の成果とまとめ

1 研究のまとめ

本委員会では会合の度に、総合的な学習の時間の実施により高等学校における指導の在り方・考え方が変わるのではないか、という意見が交わされてきた。なぜなら、本時間が従来の教科・科目の枠を越えて設けられたものであり、新しい学習指導要領の趣旨を実現する上でも重要な位置を占めるものであり、さらに、本時間を実践することによって生徒の実態に応じて各学校の特色を出すことができ、教員個々の指導力の向上が図られ、これまでにない新しい視点での教育活動が展開できるきっかけになるものであると考えたからである。本委員会は、これを「協働推進」という言葉にまとめたものである。

研究の過程では、今年度の共通研究主題との整合性をどのようにして図るかについて、生徒による授業評価の基本的な考え方を整理しながら先進的な事例を紹介するという点について協議を深めた。

また、これまであまり取り上げられてこなかった学校の特色ある実践と年間計画をあわせて紹介することとした。

生徒による授業評価の結果を受けて、本時間の授業を改善するためにはさらに大きな努力が不可欠なこと、一人一人の教員の認識を変えながら組織的な取組が不可欠なことから、実際に校内研修を通して工夫改善した例を紹介することにした。

2 今後の課題

本時間は、従来にない考え方や実践が求められており、教育・指導についての考え方も変革を求められることから、今後解決を図らなければならない課題を提示する。

- (1) 本時間の進め方については、今後とも学習指導要領の趣旨を踏まえ、各学校の教育目標・経営計画と関連付けた実践が大切であること。
- (2) 学校全体で組織的な取組が不可欠であり、有効であることを実践を通して確認することが求められること。
- (3) 小・中学校との情報交換をはじめ、様々な実践の交流が重要であること。
- (4) 地域との連携、教材や学習環境の活用について工夫をこらした授業を開発・実践すること。
- (5) 従来の教科・科目の枠を教師自らが越える努力と、「指導」観の見直しを進めること。
- (6) 生徒による授業評価は、年間計画に位置づけて実施すること。
- (7) 生徒による授業評価を受けての校内研修では、推進委員会などが具体的な課題を明らかにして共通理解を深め、改善工夫を図ること。